



巻頭言：今、図書館がおもしろい ー静けさの中の熱き思いー	矢部敏昭	1
私の選んだこの一冊		
V・E・フランク『それでも人生にイエスと言う』（春秋社）	武田修志	3
図書館に期待すること	中村謙太	4
図書館紹介：米子市立図書館	大野 秀	5
ミニ・シリーズ情報検索コーナー Webで統計情報		7
図書館利用統計		9
トピックス		11



巻頭言

今、図書館がおもしろい —静けさの中の熱き思い—

矢部敏昭

リニューアルされた本学中央図書館は、今おもしろい。多目的な自習室であるラーニングコモンズをはじめ、仲間と学習できるグループ学習室や情報メディアコーナーがある。また、自販機や飲食が可能なリフレッシュコーナーがあるばかりでなく、静かな中で書物を通して著者と語る閲覧室がある。さらに、毎月興味深い展示がされ、授業の合間のみならず、一日中いても飽きない空間である。

学生諸君自らが書店に出かけて、選書した本が並ぶコーナーがある。流行に敏感な学生のために、ベストセラーが用意され、時代の先端を黙って示すのが本学図書館の一つの姿であろう。この“ブックハンティング”は、本学学生諸君が図書館員と一緒に街の書店に出かけて、読みたい本を購入するシステムである。このシステムを知っている学生諸君がどのくらいいるのだろうか。君たちの手で図書館の機能の一部が運営される時、図書館は本来の大学図書館としての機能が発揮されよう。私たち図書館員の予想を超える学生たちが年二回のブックハンティングに出かけ、購入された多くの本が1つのコーナーを占めるならば、その書棚は学生諸君の熱き思いが語らずして示されるのである。

1. リニューアルされた中央図書館

1) ラーニングコモンズ

人間関係の希薄さを生み出した現代社会において、このラーニングコモンズは、学生同士、学生と図書館員等の関係構築をも期待できる。図書館員との共同による文献検索をはじめ、学習支援や教育研究の支援をも果たす。人間の関係性は、関係の中でのみ構築され得

るのである。

2) グループ学習室

1階にあるグループ学習室に加えて、9月からは3階にも学生諸君が学問の探究に向けて、互いに熱心な議論が展開できる部屋を設けた。是非、活用していただきたい。

仲間同士をはじめ、対話の楽しさは対話を通して未だ思いつかなかったさまざまな議論ができるばかりでなく、互いの意見をもとに新しい考えを創造するところにその醍醐味がある。

3) リフレッシュコーナー

このコーナーはまさしく、学生諸君の気持ちを新たにさせ、講義や演習、実習やサークル活動に向けて、気分を転換し前向きに次なる行動へ移す心を養う場である。

誰もが常に課題を抱えつつも、開かれた心をもって次なる一步を踏み出せる小さな勇気を与えてくれるコーナーと言えよう。

4) 郷土資料室

ここに一枚の写真と絵を贈る。



上記の写真は、16～17Cに生きた教育者コメニウスであり、その右の絵は「叡智」を表している。よく見ると、女神には2つの顔があり、右手に鏡を持ち、左手に望遠鏡を持っている。つまり、叡智とは鏡を見るがごとく過去を振り返り、望遠鏡を覗くがごとく将来を予見する人を指す。

是非、郷土資料室に何度も足を運び、古きを訪ねながら、新しき知識と道理をみつめてほしいものである。

5) 第1～4閲覧室

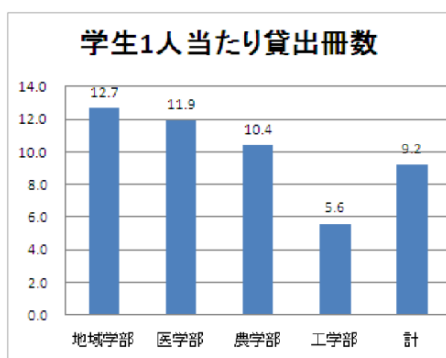
ここには、高等学校までとは違った大学図書館の雰囲気が漂う。副題にした“静けさの中の熱き思い”である。自らの態度や行動に関して、互いに周囲を気遣い配慮する。他者を思いやりつつ、読書や探究を通して、時間を忘れて集中する場である。

2. 近い将来の本学図書館像

私たち人間は知らないことを知ると、もっと知りたくなる。わからないことがわかると、もっとわかりたくなるのが人間である。わかればわかるほどに、私たちはわからないことが多くなり、知れば知るほどに、私たちは知らないことが増えることを知る。

何とも矛盾しているように思われるが、これぞ終わりになき知の探究であり、その拠点が大学図書館でありたい。学問の探究は、本来人間が自由になるために、過去から現在に至る過程の中で営まれてきたことを知る。不自由さを感じた人間が、図書館を訪れ、心の自由を求め、そして自由に目覚め、その後、立ち去るのが図書館でありたい。

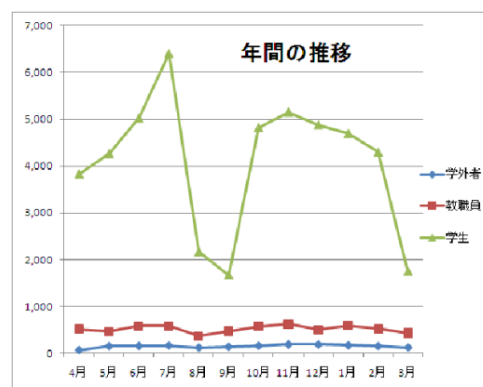
1) 現在の貸し出し冊数を2倍に！



学生諸君が一年間に本学図書館を利用して、本を借りる冊数は一人当たり何冊か知っているだろうか。

このデータを見る限り、本学学生諸君の一年間の貸し出し冊数は10冊前後であり、一か月に1冊も読まれていないことがわかる。もし、この数値が近い将来において2倍になるならば、本学図書館はその蔵書数の少なさに改善が期待できる。つまり、図書館像は君たち一人ひとりの手に委ねられているのである。

2) 現在の利用者数を3倍に！



縦軸は利用者数(人数)を示し、横軸は月別を表している。利用者数の最も多い7月や11月を最低水準にして、その利用者数が現在の3倍になるとき、本学の図書館は狭隘を理由に新たな図書館構想が浮上すると予想する。

言い換えれば、大学図書館は図書館員の手によってその機能が生かされるばかりか、本学学生・院生、および教職員と地域住民の手によってよりよく機能し、その役割が発揮されるのであると言えよう。

医学図書館は、早急に耐震改修を行い、学生諸君の気持ちに応えたい課題である。

(やべ としあき : 副学長(附属図書館長、附属学校部担当、地域学部教授))

(私の選んだこの一冊)

V・E・フランクフル『それでも人生にイエスと言う』（春秋社）

武田修志

この本の訳者山田邦男氏から直接伺ったことだが、フランクフルの著書は、『それでも人生にイエスと言う』のみならず、どの本もとてもよく売れているそうである。「翻訳者である私がびっくりするほどですよ」とのことであった。

残念ながらいまだフランクフルの愛読者である鳥大生には一人も出会っていないが、現在の日本においてフランクフルがよく読まれているというのは、私にはたいへん納得のいくことのように思われる。それは、ひとことで言えば、文明先進諸国が進むべき方向を見失い、我が国でも生の無意味感が広がっている中で、フランクフルほど真正面から「人生の意味」について、説得力ある言説を展開している思想家が、彼のほかには容易に見出せないからであろう。

ヴィクトール・エーミール・フランクフルは1905年にオーストリアのウィーンに生まれ、ウィーンで活躍した精神分析学者である。1942年9月、37歳のユダヤ人フランクフルは、ナチス・ドイツの手の者によって逮捕され、強制収容所送りとなった。その後、1945年4月27日に連合軍によって解放されるまでの2年7ヶ月間、4つの収容所で生死の境をさまよった。フランクフル自身の言に従えば、生き残った者は僅かに30人に一人の割合であった。

この過酷な体験を、心理学的分析を交えな

がら冷静な筆致で叙述したのが、『一心理学者、強制収容所を体験する』（初版1946年）である。周知のように、この本は、我が国へも1950年代に『夜と霧』という題で翻訳され、広く読まれた。2006年に、改稿された原文による新訳が、同じみすず書房から出版され、これも少なからぬ読者を獲得しているようである。

本書『それでも人生にイエスと言う』は、フランクフルがナチス・ドイツの強制収容所から解放された翌年の1946年に、ウィーン市民を前にして行った三つの連続講演を収めている。フランクフルの人間観・人生観が、非常に分かりやすい言葉で述べられていて、初めてフランクフルを読む読者には打って付けの本であると思う。

さて、この本の中に表明されているフランクフルの人生観の中で、私が最初に一読した時、最も驚き、そして深く納得したのは、「人生の問いのコペルニクスの転換」と言われる生に臨む姿勢であった。以下フランクフルの言葉をそのまま引用すると――

「私たちが『生きる意味があるか』と問うのは、はじめから誤っているのです。つまり、私たちは、生きる意味を問うてはならないのです。人生こそが問いを出し私たちに問いを提起しているからです。私たちは問われている存在なのです。私たちは、人生がたえずそのときそのときに出す問い、『人生の問い』

に答えなければならない、答を出さなければならない存在なのです。生きること自体、問われていることにほかなりません。私たちが生きていくことは答えることにほかなりません。そしてそれは、生きていくことに責任を担うことです。」

「私たちは問われている存在である」とはどういう意味であろうか？

上の引用文に心の動いた人は、是非本書を手にとって全編を熟読してほしい。

(たけだ しゅうし : 大学教育センター教授)

鳥取大学附属図書館の所蔵

中央図書館 開架 請求番号:146.8:Sor

医学図書館 請求番号:146.8:Fra

図書館に期待すること

中村 謙太

私が図書館に求めることと言えば、第一には「快適さ」でしょうか。私も、本を読み、資料を探し、テスト勉強をやり、大学図書館に出向きますが、そういった大学生活の拠点として、図書館には様々なニーズの人がそれぞれ快適に思考できる場であって欲しいと思います。

例えば、鳥取大学附属図書館でも、個人的に静かな空間で本の世界に集中したかったり資格やテストの勉強をしたい人もいれば、グループでの勉強やサークルの会議を開いたりプレゼンテーションの練習の場として、図書館を利用する人もいますよね。これら違う目的で図書館を利用する人たちにとっては、それぞれ図書館に求めること、求める「快適さ」は違ってきます。前者は、当然静かさや隣と仕切られた個人用の勉強スペースを求めますし、後者は声を出してもいい空間や広いテ-

ブルが欲しいと考えます。この大学の図書館は、これら様々なニーズに応えられる施設として、広い学習スペースや AV コーナー、グループで利用できる個室があったりと、かなり充実しているように思えます。しかし、図書館をよく利用している友人に指摘され、また私も感じていることなのですが、この大学の図書館は、少々静けさに欠けると思うのです。原因としては、学習室が広がることにより利用者が増え、人数が増えると当然静かさは失われていく……といったところなのでしょうし、利用者が増えるということは図書館が学生みんなにとってよりよい場所になっているということでもあり、仕方ないのかも知れませんが、やはり図書館の本質は静かに本を読み思考できる場所だと思うので、そこは残念に思います。ちなみに、私のお勧めは、1階の AV コーナーと 2階の端っこのソファ。

あの辺りは本棚や壁の陰になっておりテーブル席とも離れているので、とても静かですよ。

第二には、「情報量」。これは図書館の利用目的を考えても、外せない項目ではないでしょうか。

インターネットや電子ジャーナル、電子書籍など、どんどんデジタル化が進む現代で、図書館はどうあるべきか。そんな難しいことはよく分かりませんが、図書館は、アナログだからこそ、予期せぬ素晴らしい本との出会いがあると思います。確かに、ネット検索のような、確実に欲しい情報のみをピックアップできることも勉強や研究には大事でしょう。大学図書館にも、OPACのような検索システムなどが完備されています。しかし、ふらりと本棚を見て回り、ふと目に留まった本をぱらぱらめくってみることができる、これが図書館の良いところだと思うのです。私の高校時代の恩師が進路に悩む生徒たちに掛けた言葉に、「図書館に行って、しばらくアテも無くぶらついてみる。そして、ふと目に留ま

った本を何冊か引き抜いて見ろ。それが君たちの興味を持っている事から(ジャンル)だ」というものがあつたのですが、こういった本との出会いはやはり、デジタルではなく、実際に本を見て触ることができる、図書館でしかできないことです。とはいえ、アナログだけでは蔵書量にも限界がありますしスピードも劣るということで、他大学や他図書館からの資料の取り寄せや文献複写などの機能も充実しているのですが、そういったせつかく在る便利な機能の存在を知らない学生が多いように思うので、広報のほどよろしくお願ひします。

図書館が学生生活の様々な場において、より重要な拠点となるよう、応援しております。

(なかむら けんた 農学部・生物資源環境学科 3年)



シリーズ鳥取県内の図書館 第3回 米子市立図書館

「新しい市立図書館像を求めて」

米子市立図書館 統括司書 大野 秀

米子市立図書館は、米子市政 15 周年事業として昭和 17 年 11 月に「米子市立図書館」として開館し、戦後の長期にわたる県立による運営の後、平成 2 年 9 月、鳥取県から米子市に移管され、新たな市立図書館として再スタートしました。早いもので、開館以来 21 年を経たこととなります。米子市立図書館前史はとても古く、すばらしい歴史を持つ図書館で

もあります。

平成になって移管された後は、市立図書館の長い前史によって作られた貴重な資料の蓄積と県立図書館時代に培われた図書館の性格を、いかに現代の市立図書館としてふさわしい姿へ変えていくかが大きな課題でもありました。県立時代 10 年近く閉鎖されていた児童サービスを復活し、狭い建築面積の中で貸出

スペースを最大限とるよう書架の配列から見直していきました。

平成 9 年、米子市の方針によって学校図書職員の配置が始まると、市立図書館では、これを機会に学校図書館支援を図書館業務として積極的に推進することにしました。平成 9 年から始まった図書職員配置は 4 年間で小 23、中 10、養護 1 の 34 校全校配置を終わりました。学校図書館との関わりが目に見えて動きはじめたのは、職員配置の後、長期団体貸出の始まった平成 11 年度からといえるでしょう。最初は県立図書館から借りた図書だけでしたが、次第に市立図書館の資料も増やしていきました。最初の頃は、団体貸出の資料を入れるブックコンテナの用意もなく、書店をまわってダンボール箱を手に入れるところから始めたサービスでした。

平成 13 年からは米子市の公用車を使った平日の物流網が完成し、長期団体に加えて毎日の学校からのリクエストにも応えることが可能になりました。さらに平成 13 年度から 15 年度までは文部科学省の「学校図書館資源共有型モデル地域事業」に参加し、学校間の資料検索が可能になりました。平成 14 年には市内全校に司書教諭の配置が完了しました。翌 15 年には市立図書館を経由した学校間の物流も開始しました。



メール便による搬出



長期団体のセット組み

小・中学校用の郷土史料解説冊子『ふるさと米子探検隊』の編集を平成 16 年から開始（現在 16 号まで刊行）。図書の物流網の上に、この児童・生徒用郷土史料ガイド冊子を加えることで、ソフトとハード両面からなる「米子方式」と呼ばれる学校支援のスタイルを作り上げました。毎年、遠くから団体の視察を迎えるなど、高く評価されているサービスです。

市立図書館はすでに平成 10 年から、鳥大医学部附属病院院内図書室に団体貸出を始めていましたが、鳥取大学附属図書館との相互協力協定が平成 17 年 9 月に取り交され、この時から医学図書館への団体貸出も始めました。また、鳥大附属図書館主宰の「地域の図書館レベルアップ貢献事業」での石井保志氏（健康情報棚プロジェクト代表）の講演などを契機に、平成 19 年 3 月より「健康情報棚」を設置しました。同様に、ビジネス支援（平成 17 年）、「法律情報棚」の設置など（平成 19 年）、ささやかながら新しいサービスにもチャレンジしています。ビジネス支援資料などは、児童書を上回る貸出率を記録し、このジャンルの需要の大きさを改めて司書に教えてくれる結果となりました。

当館ではまた、図書館活動の全体像を利用者にわかりやすく速やかに伝えようと、特にホームページの構成と更新に注意を払ってい

ます。幸いなことに、図書館情報学の専門家の大串夏身先生からは、「学校支援」のページを「あうる」(2007.10・11)誌上で、また日図協・健康情報サービス委員の小林順子氏からは、「健康情報棚」の画面構成を「みんなの図書館」(2009.9)で評価していただくことができました。

現在、米子市立図書館は、大きく飛躍する前の生みの苦しみの時期にあります。マスコミ等で報道されている通り、「伯耆の国よなご文化創造計画」に基づき、図書館の増改築計画が進められているからです。もともと資料保存とレファレンスを主たる業務としていた県立時代の狭隘な建物を、増改築によってバリアフリー化を実現し、さらに市立図書館らしく貸出開架を広くとり、児童サービスを前面に出したフロア展開にする予定です。

しかしながら、増改築によって実現できる新しいスペースでも、奉仕人口に対して決して十分なものではありません。限られた条件の中で、学校支援サービスをさらに進化させ、合併した淀江町までも含んだ全域サービスをどんなふうに組み立て直すのか。

増改築計画の進行とともに、利用者の声に耳を傾けつつ、館長以下関係部局が一丸となって、新しい理念と基本計画を練り直しているところです。



ミニ・シリーズ情報検索コーナー

Webで統計情報を利用しよう！！

統計情報というと、かつては分厚い統計書をめくって調べるのが常でしたが、現在はインターネットで入手できる統計情報が増えています。とくに総務庁統計局など公的機関の作成する最新の統計情報は、その多くをインターネットで利用することができます。データをエクセル形式でダウンロードすることもできます。

これらの統計情報を入手できる主なサイトについてまとめてみました。

●政府統計

e-Stat (総務省統計局) <http://www.e-stat.go.jp/>

政府統計の総合窓口。国勢調査、人口動態調査など主要な統計調査の名前、キーワードなどから検索ができます。

日本統計年鑑 <http://www.stat.go.jp/data/nenkan/index.htm>

我が国のもっとも包括的な統計書。第59回(平成22年)以降を閲覧できます。

独立行政法人統計センター <http://www.nstac.go.jp/>

公的統計のオーダーメイド集計サービスがあります。

●特定分野の統計

白書・統計資料リンク集（鳥大附属図書館）

<http://www.lib.tottori-u.ac.jp/list/whitepaper.htm>

特定分野に限った統計情報は、その分野の白書などに掲載されている場合があります。

●鳥取県の統計

とっとり統計ナビ <http://www.pref.tottori.jp/toukei/>

鳥取県の統計情報を分野やキーワードから検索できます。

鳥取県統計課公表の統計データ

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=9028>

『鳥取県統計年鑑』をはじめとする統計書のデータをエクセルでダウンロードできます。

利用できる範囲は統計ごとに異なります。

●世界の統計情報

外国政府の統計機関リンク集（総務省統計局） <http://www.stat.go.jp/info/link/5.htm>

国際機関等の統計関係ページ（総務省統計局） <http://www.stat.go.jp/info/link/4.htm>

〈注意〉

利用できる範囲は統計ごとに異なります。最近のデータは利用できても古い統計データは冊子体でないと利用できない場合があります。冊子体については鳥大図書館 OPAC <http://www.opac.lib.tottori-u.ac.jp/opac/> で所蔵状況をご確認下さい。また、鳥大に所蔵していないものでも、県立図書館など県内図書館で所蔵している場合があります。



e-Stat（総務省統計局）

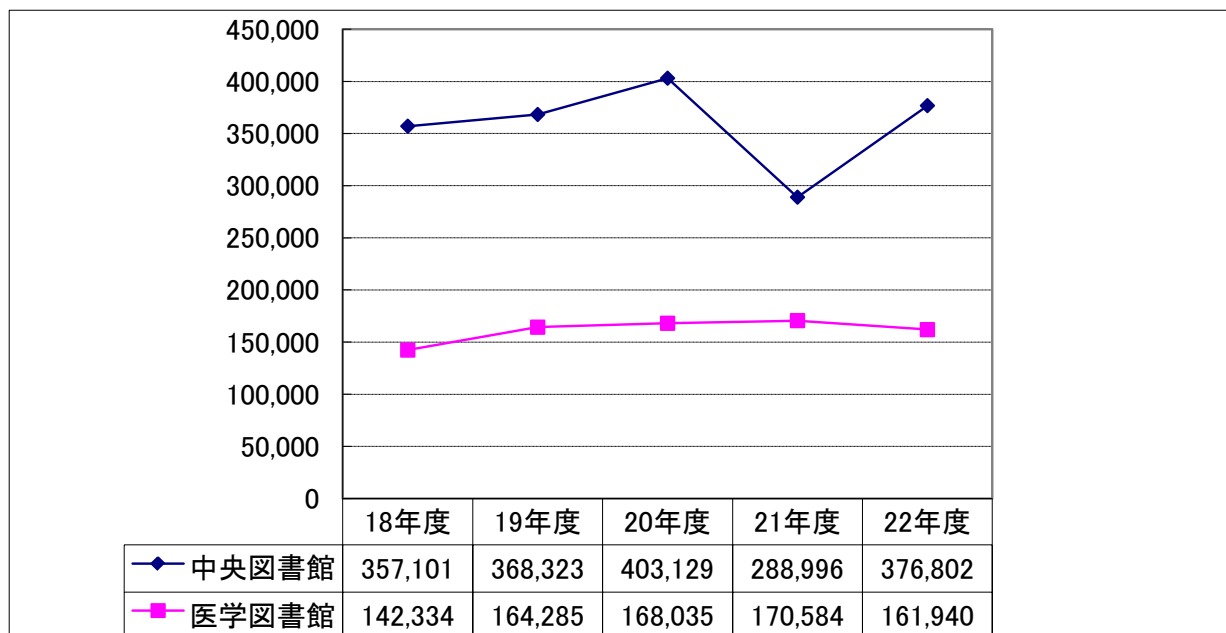
附属図書館利用状況(最近5力年)

年度別開館日数

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
中央図書館	311日	312日	310日	* 291日	323日
医学図書館	327日	308日	326日	331日	331日

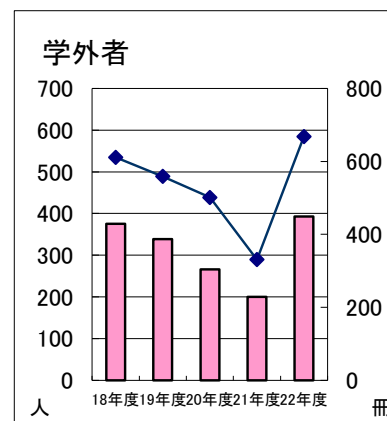
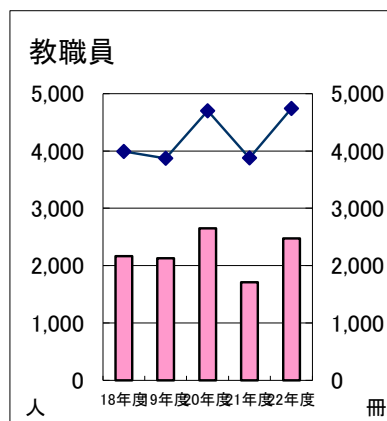
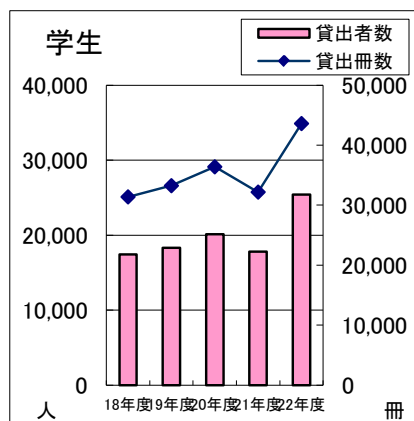
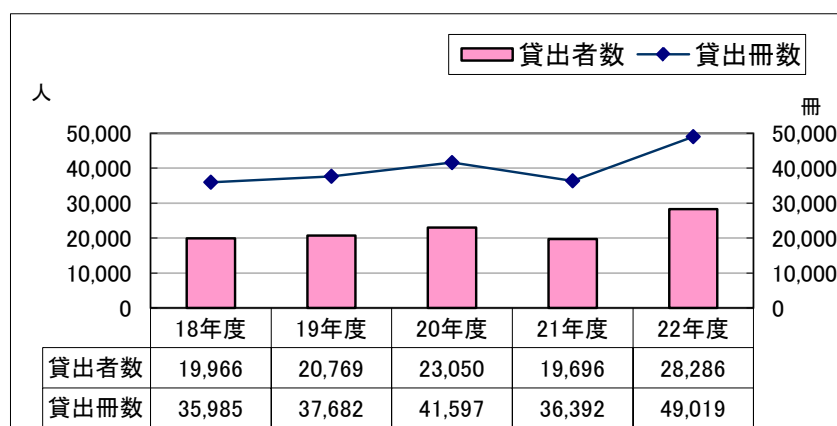
年度別入館者数

* 耐震改修のため、
仮設図書館で運用

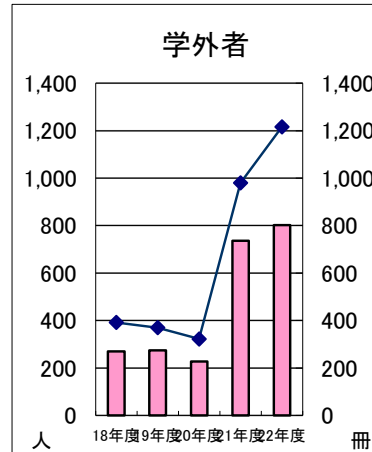
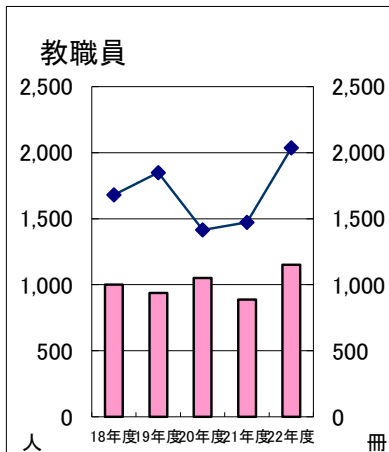
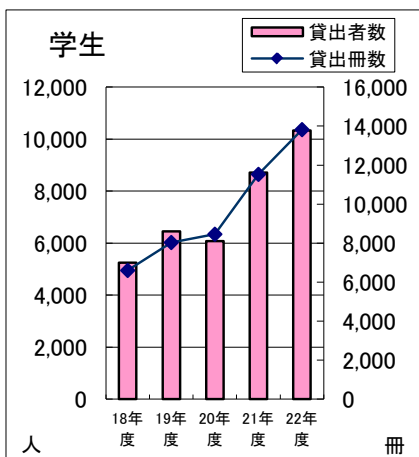
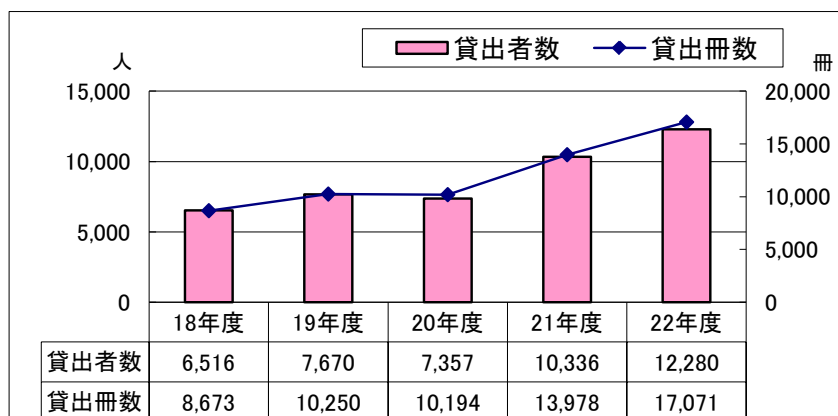


年度別貸出者数・冊数

中央図書館



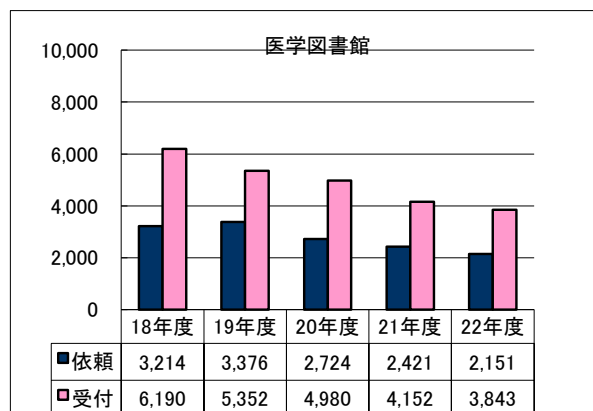
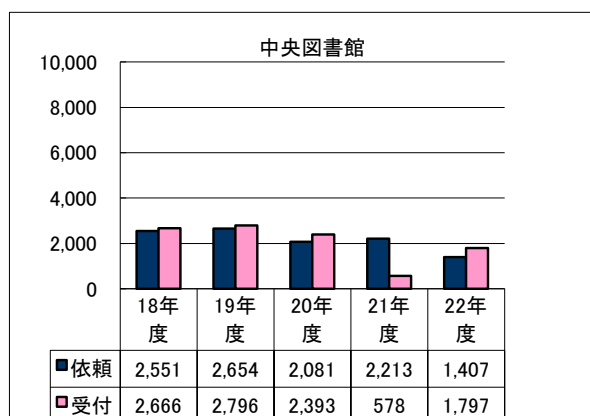
医学図書館



平成22年度分類別貸出冊数

分類	中央図書館		医学図書館	
	冊数	割合	冊数	割合
0 総記	6,220	12.7%	69	0.4%
1 哲学	1,478	3.0%	442	2.6%
2 歴史	1,285	2.6%	91	0.5%
3 社会科学	7,216	14.7%	338	2.0%
4 自然科学	11,055	22.6%	14,370	84.2%
5 工学	6,516	13.3%	94	0.6%
6 産業	3,788	7.7%	25	0.1%
7 芸術	1,816	3.7%	465	2.7%
8 語学	2,230	4.5%	82	0.5%
9 文学	7,415	15.1%	1,095	6.4%
総数	49,019		17,071	

文献複写学外依頼・受付件数



トピックス

第59回中国四国地区大学図書館協議会総会及び 第38回国立大学図書館協会中国四国地区協会総会を開催

第59回中国四国地区大学図書館協議会総会及び第38回国立大学図書館協会中国四国地区協会総会を、4月21日（木）～22日（金）にホテルモナークで開催しました。中国四国地区大学図書館の館長、事務部課長等95名（国立11大学、公立12大学、私立35大学）が参加しました。鳥取大学本名理事（教育担当、環境担当）・副学長より開会のあいさつがあり、全体会議、職務別会議で、新コンソーシアムへの移行・統合について、災害発生時における大学図書館の運用、サービス及び連絡体制など、大学図書館を取り巻く諸課題について、協議および意見交換を行いました。

地方新聞「鳥取新報」をマイクロ化しました

平成23年度学長裁量経費により、鳥取県の地方新聞である「鳥取新報」をマイクロ化しました。現在の『日本海新聞』の前身の一つで、1883（明治16）年6月、ジャーナリスト高橋由蔵により『山陰隔日新報』として創刊され、1885（明治18）年11月に『鳥取新報』と改称しました。当初は経営難に苦しみましたが、鳥取の新聞としては初めて長期の発行継続に成功したものです。

原紙を所蔵している図書館が少ないため、保存と利用を目的としてマイクロ化を行いました。マイクロフィルムの閲覧は、図書館カウンターに申し込みして下さい。

鳥取大学における所蔵（一部欠号有り）

明治37年3、6－12月、明治38年4－6、11月、明治39年1－2月、明治40年5－6月、明治43年8－10月、明治45年7月、大正元年8－9月



鳥取大学附属図書館報 第118号（2011年10月）

〔編集・発行〕国立大学法人 鳥取大学附属図書館中央図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地 【TEL】(0857)31-6728 【FAX】(0857)28-6346

〔E-Mail〕tosyokan-m@adm.tottori-u.ac.jp / 〔ホームページ〕<http://www.lib.tottori-u.ac.jp/>

Copyright (C) 国立大学法人 鳥取大学附属図書館 【本館報について一切の無断転載を禁止します】